

ねんりきケンちゃん

皿海達哉作

大島加奈子絵

1

学校からの帰りしな、郵便局の角がって四十メートルほど歩いたときだった。ケンちゃんの左上の空から、大きなハトが三羽、いっしょに飛んできて、右上の送電線に、ほとんど同時にバサツととまった。太い送電線は、音もたず、少しゆれた。

ケンちゃんが見あげると、三羽ならんだハトのいちばん手前のが、じろりと見おろしてきた。

ケンちゃんは、殺気を感じた。

下を通るとき、そのハトは、フンを落とすにちがいない。白のまじった灰色のフン。固いようでやわらかく、下のものにあたると、ぐしゃつとつぶれる、くさいフン。



道の左に寄って、フンの落下を避けてもよかったが、ケンちゃんは、そうしなかった。男らしくない気がしたし、自分の予感があたるか知りたい気もした。そして、予感があたるかどうか試すほうを選んだ。

とはいえ、ハトの三きょうだいに、三連発でフンを落とされてはかなわない。最初の一発だけでかんべんしてもらいたい。

そこで、ケンちゃんは、念力を使うことにした。

「お願い、お願い、お願いーい！ 二ばんめと三ばんめのハトくんは、フンをしないでください。願いをかなえてくれたら、お礼に歌をうたってあげます……！」

ケンちゃんは、右側通行で、道の右端、ジャガイモ畑の